

9章 研究冊子は、子どもと教師の合作(備品 290)

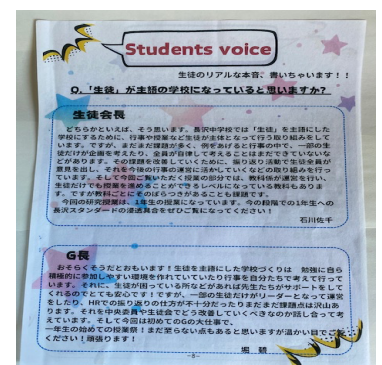
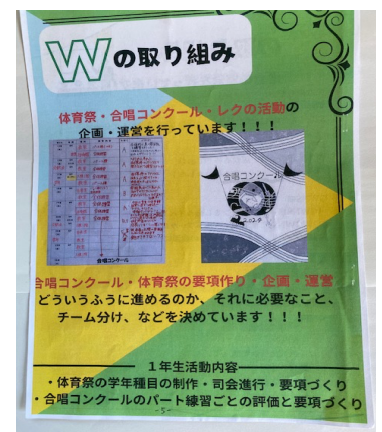
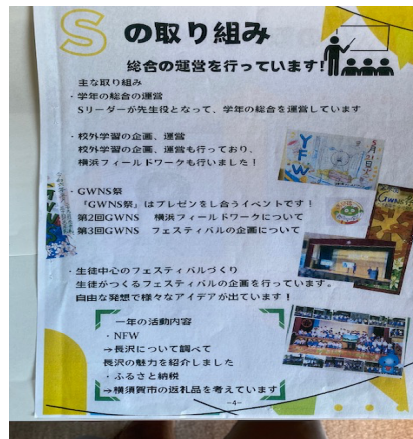
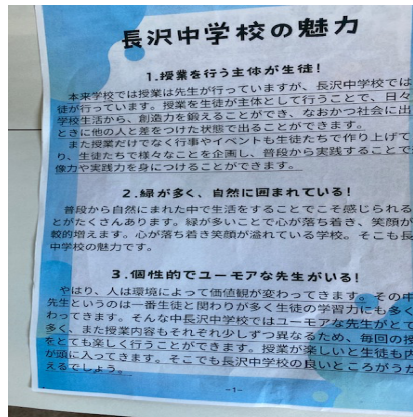
当たり前なことがまた一つ。研究冊子は子どもと教師の合作だ。これまで教師だけで研究冊子を作成するのが当たり前なこととされてきた。しかし、私たちは、「主体的で対話的で深い学び合いの授業」「個別最適な学習活動」「協働的な学習活動」を目指してきた。この趣旨の向かう一つの策は、「子どもと教師の合作な研究冊子」であった。子どもたちが仲間と相談して作成する。教師も参加する。やっと当たり前に戻ってきたようだ。

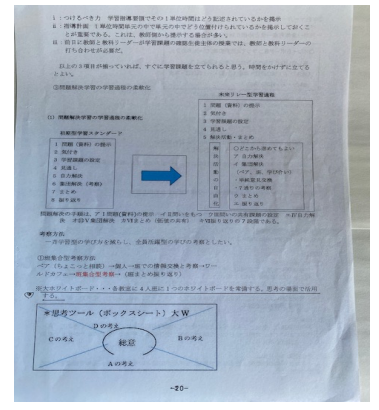
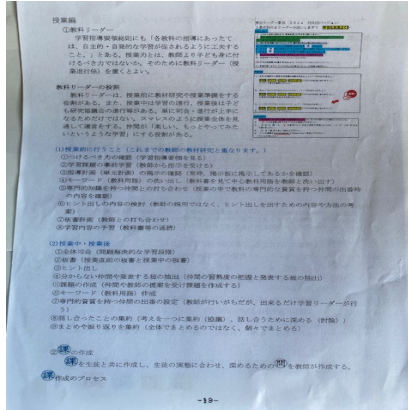
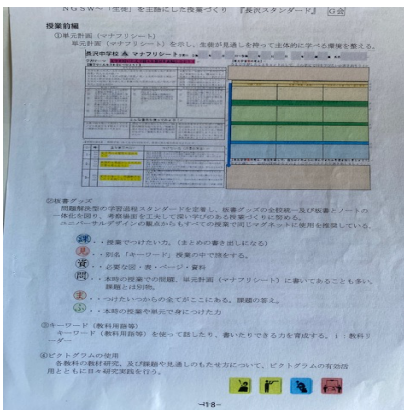
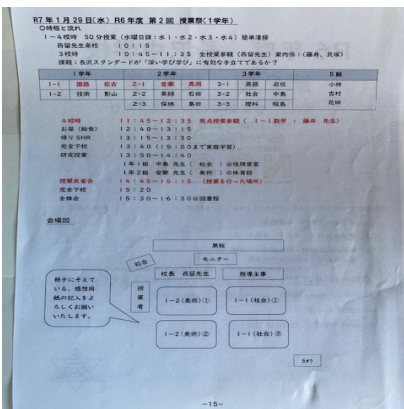
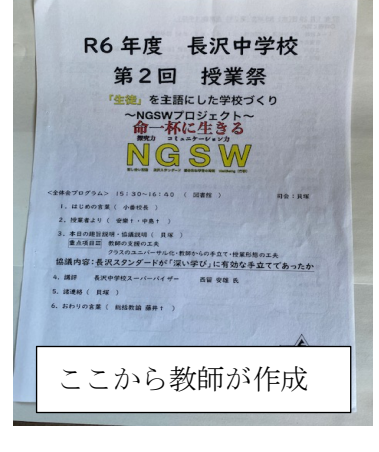
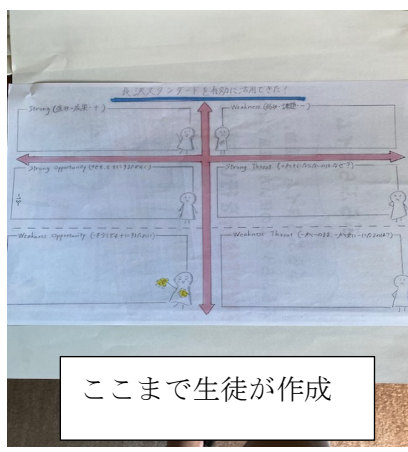
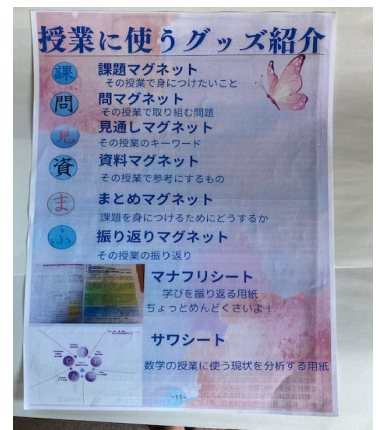
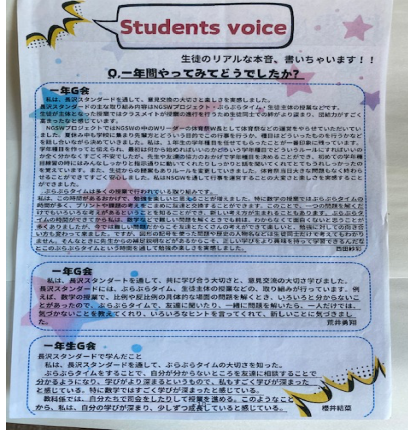
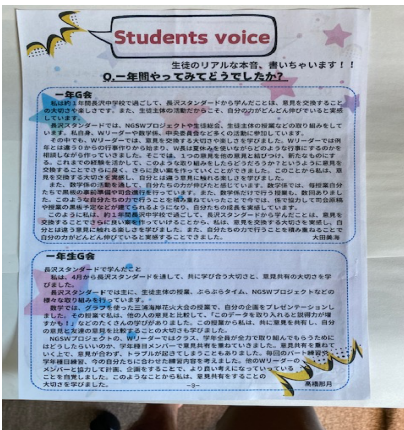
なお作成する時には、良いものを作成しようと思過ぎないことだ。研究で出た事実を紙面に起こせばよいと思う。

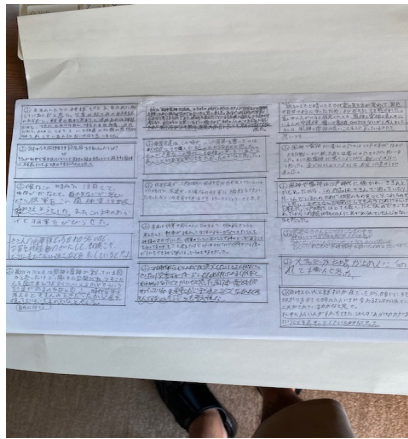
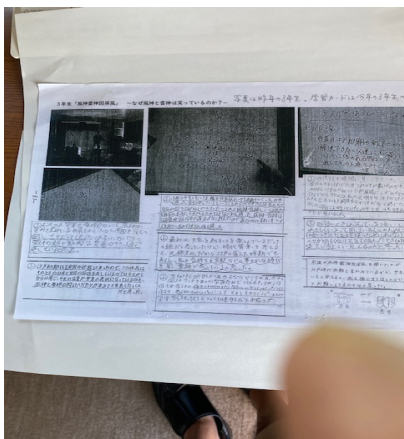
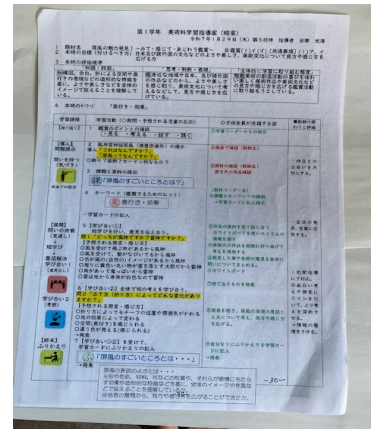
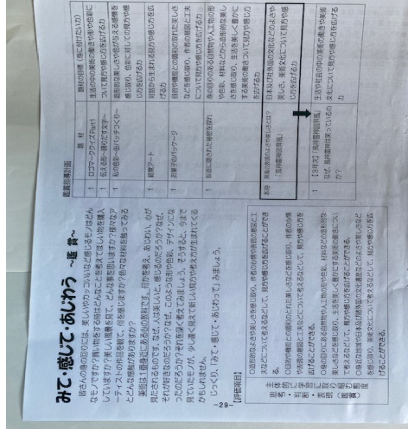
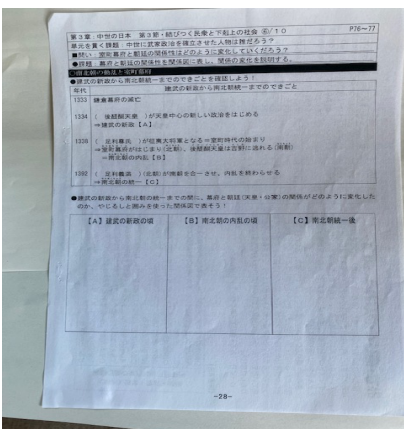
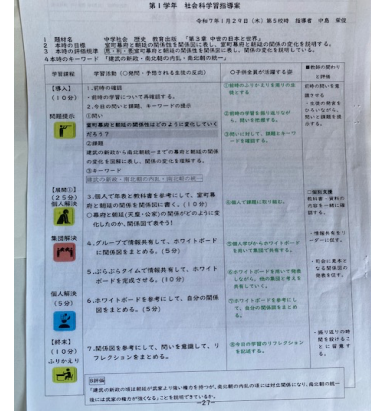
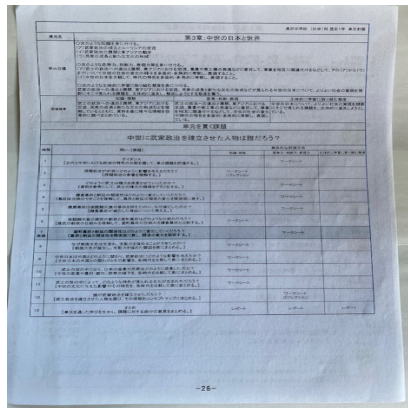
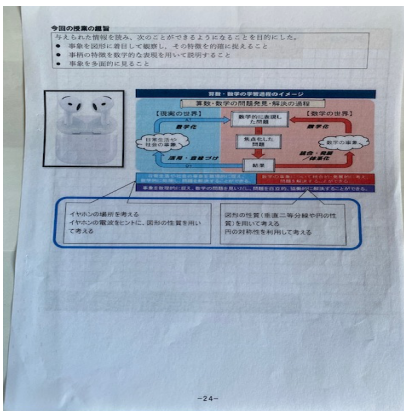
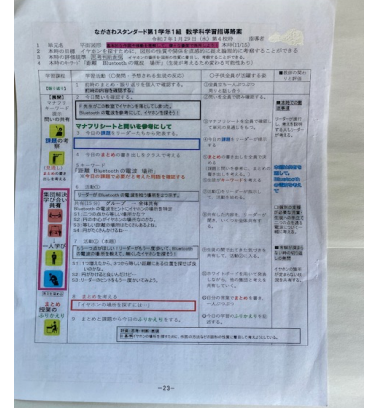
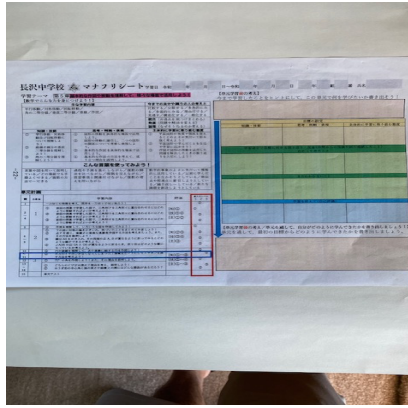
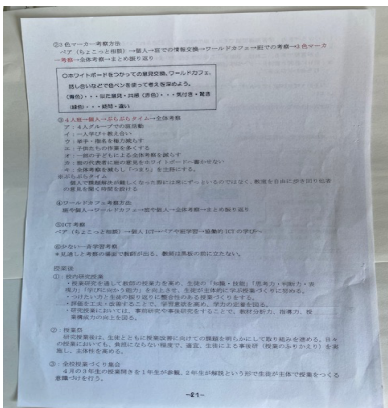
製作している学校は、子どもと教師の作成部分を分けている。研究は子ども達が委員会活動として年間、活動をして行うことがカギとなる。作成物は、全生徒と教師にデータとして渡し、更に進化する授業を目指しているようだ。子どもが学校を成長し続ける責任を果たしているようにも思える。

～ぶらぶらタイムの時間が出来る前は、分からなくて面白くないと思うことが多くありました。今では、難しい問題だからこそ友達とたくさんの考えをもつことが出来て楽しいです。勉強に対しての向き合い方も変わってきました。ですが、図形の記号を使った問題や歴史上の人物名などは、生徒同士だけで考えても分かりません。そんな時の先生からの補足説明があります。これがあるから、正しい学び方でより興味を持って学習できるんだと、このブラブラタイムという時間から勉強の楽しさを実感しました。～ (冊子の紙面の長沢中Nさん)

1 研究冊子は、子どもと教師の合作 (長沢中)







2 教師の校内研修会

(1) 教師だけの研究会

現学習指導要領の「主体的」「対話的」「協働的な学び」のキーワードの主語は、「子どもが」である。次期学習指導要領の「個別最適」「協働的な学び」の主語も「子どもが」である。つまり、子どもたち側の学びに沿う校内研修でなければならないが、相変わらずの教師だけの研修となっている。子どもたちも校内研修に主体的に参加をする仕組みを整える必要がある。

(2) 教科教育の研究に偏る

教育 DX、探求的な学習等、新たな指導方法が求められている。こうした指導方法も確かに重要だ。だが、いざ推進となると「教師中心の教科教育」が中心となる。教育 DX、探求的な学習もこれまでの学習方法に新たな指導方法を加味しただけだ。特に教科教育の研究の偏る校内研修を変えることが重要である。「探求」というキーワードも出てきたのは、これまでの教科教育があまりにも「知識の注入」が多かったからだ。探求というキーワードを使えば変わるだろうという考えはよく分かる。

事後研究会が変わらない
①褒めるだけの協議会
②変えない研究協議会方法
③ワークショップのマンネ化
④子どもの参加がない（指導要領は自己評価・相互評価）
⑤評価の数値化が進まない

(3) 2030 型セルフラーニングの学びの前の確認事項

これまで記述してきたが、2030 型の学びは、「課題や学び方の選択」「学習リーダーが中心となり授業を創る」「学び方の評価は子どもと教師が協働で行う」このようなことが中心。その前に確認しておくことがある。

①教師にとっても最も大切で困難なことは、「教えない」ことの確認

これまでの授業過程は、「教師が発問→子どもたちに考えさせ意見を出させる→教師がまとめる」。アクティブラーニング風だ。教師がこだわる教師主体の授業だ。これからは、「目標を子どもたちが共有→子供たちによる解決の見通しと計画→子どもたちによる振り返る授業」。子どもの学びの活動に教師が入る余地などない。

②校内研究であるという意識

教科に強い教師の育成を目指しているのではない。だから校内研究が教科を理解している教師の独壇場であってはならない。全教師の授業力の向上を目指しているのが校内研究だ。個人研究の場ではない。

ア 同じ指導方法にこだわる

各自が授業をばらばらに工夫するのではない。同じグッズ、同じ問題解決過程、同じ板書、同じノート指導、同じ見通しの指導、同じまとめ方の指導、同じ振り返り指導等、共通点を持てば、お互いの授業を見たときに自分だったらこうしようと自分事に考える。これが校内研修だ。

イ 続く教師のために

今後、各学校に転入してくる教師の育成が課題となる。だから、同じスタンダード学習方法にこだわることが重要だ。先に学んだ教師に自分流の授業をされると次に続く教師は、何を基準にしたらよいかわからなくなる。

ウ 授業のユニバーサルデザイン

授業のユニバーサルデザイン（高知県ではベーシック）は、障害のある子供のためにだけ作られたものではない。全部の子どもに「ないと困る」「あると便利」な内容であることが重要である。授業のユニバーサルデザインは、「誰にも分かりやすく、安心して授業に参加できる」環境の一つである。

(4) 2030 型子どもを「主語」にした校内研修

(1)子どもが主体的な学習活動案 ○授業学級の子どもに活動案を配布○やさしい記述、少ない字数・○ピクトグラム等の図を増やす(2)子どもが主体的な研究協議会 ○子どもたちの協議会と教師の参加 ○子どもたちの研究発表

教師だけの研究会を子ども参加型へ
・学習指導案から学習活動案へ
・事後研究会から子ども協議会へ

(5) 2030 個別最適・協働的な学びの授業評価

①まずは、問題解決的な学習過程の評価 ②4 視点の項目を混ぜ評価を行う。③見える評価の前に、個人内評価（授業備品 294 号）④子どもと教師が一緒になり評価を行う。（教師だけの評価は止める）⑤教師間の評価は、付箋紙やタブレットを使い短時間で行う。